

## 2007年度 社会学部優秀論文賞（安田賞）講評

選考委員代表 田 中 耕 一

本年度は、社会学部優秀論文賞（安田賞）候補論文として、別表に示すように、9篇（10名）の卒業論文（社会学科7篇、社会福祉学科2篇）が、研究演習担当者から、推薦された。6名の委員から成る社会学部優秀論文賞（安田賞）選考委員会は、それぞれの候補論文について、学術的価値という観点から、とくに①問題の設定や着眼点、あるいは研究の方法に独創性やユニークさが認められる、②新しい発見や提案があり、それを裏付ける信頼性の高いデータ・資料が提示されている、あるいは非常に説得力ある論述が展開されている、③資料の収集と整理に非常な努力が払われ、学術的価値の高い資料となっている、のいずれかの条件を満たしているかどうか、に留意しながら、慎重な審査を行った。その結果、1篇（1名）に最優秀論文賞を、3篇（4名）に優秀論文賞を、そして5篇（5名）に佳作を、それぞれ授与することに決定し、社会学部教授会にて承認された。

ここでは、最優秀論文賞を受賞した、畝山佳子さんの卒業論文「流産・死産・早期新生児死と配偶者の死の悲嘆の違い —ソーシャルワークの視点から必要なケアを考える—」を紹介しておきたい。この論文は、流産や死産、早期新生児の死を経験した母親が、どのような悲嘆過程をたどるのかを明らかにし、ソーシャルワークの視点からどのような支援が必要なのかという問題を考察したものである。悲嘆研究のなかでは、まだ十分に上げられていない、流産・死産・早期新生児死の悲嘆過程を取り上げ、これまでの一般悲嘆理論と比較しながら、その共通性と特異性を明らかにするという問題設定とアプローチは、学術的に大変優れたものである。また、流産・死産・早期新生児死を経験した母親の手記をもとにし、これらをテキストデータ化し、内容分析と分類化によって、流産・死産・早期新生児死の悲嘆過程と配偶者の死の悲嘆過程の違いを明らかにするという検証過程は、緻密かつ周到であり、その結果として導き出される結論（悲嘆段階は基本的に同じであるが、死の否認が強いというより複雑化すること、悲嘆の段階を後退し悲嘆が再燃することがあること、怒りが自分自身に向けられること、など）も重要なものばかりであると考えられる。もちろん全体としてみれば、いくつかの問題点（レビュー論文の紹介にみられる冗長性や、ソーシャルワークの視点から、本人の家族などへのアプローチを考慮に入れる必要性など）を指摘することはできるが、それによって、本論文が最優秀論文賞に値するという評価はまったく揺らぐものではない。

この他に、優秀論文賞を受賞した3篇（4名）の論文、そして佳作となった5篇（5名）の論文については、ここでその内容を紹介することはできないが、すべての受賞論文が、それぞれに強い個性をもった力作ばかりであり、それぞれに極めて高い潜在能力を示していたことを強調しておきたい。受賞された10名の学生諸君が、今後ともこの受賞を励みとして、それぞれの分野で、力強い歩みを続けてもらうことを切に期待する。

最優秀論文賞	卒業論文名
畝山 佳子 (藤井美和ゼミ)	流産・死産・早期新生児死と配偶者の死の悲嘆の違い —ソーシャルワークの視点から必要なケアを考える—
優秀論文賞	卒業論文名
平尾 朋子 吉野真希子 (大谷信介ゼミ)	教科書は都市をどう描いていたか? ~高校教科書の内容分析~ (共同執筆)
関 周次郎 (山上浩嗣ゼミ)	ハイデガー『存在と時間』における存在論と神学の関係について
陰山真希江 (三浦耕吉郎ゼミ)	実在の解体から知覚の原点へ —カンディンスキーの抽象絵画にまつわる考察において—
佳作	卒業論文名
岡本奈津子 (野瀬正治ゼミ)	携帯電話ユーザーの携帯キャリア選択についての研究 —比較分析(NTTドコモ等)の視点から—
杉谷 香 (打樋啓史ゼミ)	「見えない差別」の時代を歩むろう青年たち —「豊か」な社会にろう青年たちはどう生きるのか—
竹田 雄司 (岡田弥生ゼミ)	『冷血』における主観と客観の矛盾
鞍馬 一平 (高坂健次ゼミ)	架空の歴史と戦争を求める現代社会 —「架空戦争としてのロボットアニメ」というひとつの方向へ向かった男の子文化
杉本 明久 (大和三重ゼミ)	難病支援におけるソーシャルワーク実践の展開 —ALS支援からの考察—